

しよううつしあさがおばなし

生写朝顔話

〔解説〕

天保三年（一八三二）大坂竹本木々太夫座初演。全五段、時代物。文政年間、山田案山子（近松徳叟）が儒学者熊沢蕃山の作と伝えられる『露の干ぬ間』という小唄をもとに想を構え、「生写朝顔日記」と題した浄瑠璃を竹本重太夫の為に創作しましたが上演に至らず、それを翌年、近松柳が「徳叟遺稿朝顔日記」という読本にして人気を呼び、耶麻田加々子が添削して浄瑠璃に仕立てました。その後、嘉永三年（一八五〇）萃松園が添補潤色したものが、現在の作品の基礎となりました。この浄瑠璃は、道中の名所が次々と出て来て変化に富み、すれ道いや錯誤・道化・慟哭等様々なドラマの要素が含まれることから、よく上演される人気作となっています。また、『露の干ぬ間』に琴唄を取り入れて、音楽的にも特徴のある作品になっています。

〔あらすじ〕

宮城阿曾次郎と芸州岸戸の家老秋月弓之助の娘深雪は、京の宇治で出会い恋に落ちます。折しも阿曾次郎は鎌倉出張の命を受け、別れ際、朝顔の歌を扇に書いて深雪に与えました。急遽本国へと引上げる事になった秋月家の一行が明石で風待ちをしている時、深雪は偶然阿曾次郎と再会しますが、それも束の間、二人は再び別れ別れとなり、国へ帰った深雪は、父から駒沢次郎左衛門に嫁ぐよう言い渡されます。駒沢次郎左衛門とは、伯父の養子となり名を改めた宮城阿曾次郎だったのですが、それを知らぬ深雪は、思い余って家を出、阿曾次郎を探す旅に出ます。

放浪の末、辛苦から盲目となった深雪は、三味線片手に唄を歌って日々をしのいでいました。やがて深雪を探す乳母浅香と浜松で出会いますが、浅香は悪漢から深雪を守るため深手を負い、島田宿の父を尋ねるように言い残して息絶えます。

一方、駒沢次郎左衛門は岩代多喜太と共に島田の宿の戎屋に泊ります。岩代は同じ藩士であるものの悪人の一味で、しびれ薬で次郎左衛門を亡き者にしようとして企てますが、宿屋の主人徳右衛門の機転により失敗します。はからずもこの宿で盲目姿の深雪と再会した次郎左衛門でしたが、任務の途中とあって、それと明かすこともできず、万感の思いで深雪の演奏する朝顔の唄を聞き、徳右衛門に目の秘薬を言付けて出立するのです。次郎左衛門が残した扇から、実は阿曾次郎であった事を知った深雪は慌てて後を追います。

〈大井川の段〉阿曾次郎を追って大井川までやってきた深雪ですが、一足遣いで大井川は川止めとなつてしまいました。失望の果て入水しようとした時、徳右衛門と下僕関助がかけつけ、深雪の祖父が大恩を受けた故主であると知った徳右衛門は、甲子生まれの男子の生き血とともに飲めば薬効ありという薬を深雪に飲ませる為に切腹、薬を飲んだ深雪は薬効により目が開きます。

その後、深雪は次郎左衛門と再会し、晴れて夫婦となるのでした。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

大井川の段

追うて行く

名に高き街道一の大井川、篠を乱して降る雨に、打ち交りなるはたたがみ、漲り落つる水音は物凄くもまたすさまじき。夫を慕う念力に道の難所も見えぬ目も、いとはぬ深雪が、こけつ転びつ、やう／＼こゝに川の傍

「ノウ川越たち。駒沢次郎左衛門様といふお侍。もう川をお越しなされたか。まだか聞かして聞かして」と言ふ声さへも息切れの、声に川越口々に「ヲ、その侍は今の先渡った。ガ俄の大水で川が止った、川止め／＼」

「ヤアナニ、川が止まった。ハ、ア、悲しや」

と張詰めし力も落ちて伏転び、前後不覚に泣きけるが、また起上がって見えぬ目に、空を睨んで

「天道様、エ、聞こえませぬ／＼、聞こえませぬわいなあ。この年月の艱難辛苦もどうぞま一度その人に逢はしてたべと片時も、祈らぬ間とでもないものを、今日に限つてこの大雨。川止めとは／＼、エ、何事ぞいの。思へばこの身は先の世で、いかなることの罪せしぞ。さても／＼味気なや、焦がれ／＼たその人に、逢うても知らぬ盲目の、この目はいかなる悪業ぞや。夫の後を恋ひ慕ひ、石になつたる松浦湯、ひれふる山の悲しみも、身に比べては数ならず、三千世界を尋ねても、こんな因果がまたと世にあるべきかは」

と口説き立て、拳を握り、身をふるはし、流涕焦れ歎

きは余所の見る目も哀れなり。やゝあつて起き直り

「ヲ、さうぢや〜。とても添はれぬ身の業因。この川水の増りしは、所詮死ぬとの事なるべし。未来で添ふを楽しみに、こゝを三途の川と定め、弘誓の船に法の道。急がんもの」

と、泣く〜も、夫を恋し小石の数、袖や袂に拾ひ込み

「南無阿弥陀仏」

の声諸共既に飛ばんずそのところへ

「ヤレお待ちなされ深雪様」

「イヤ〜、誰かは知らねど、放して〜」

「マア〜待たしやれ朝顔殿。コレ関助殿とやらが見えたぞや」

「ハ、ア、下郎奴でござります。マア〜、気をおしづめなされませ」

と無理に手を取り抱き退くれば

「ム、関助か。遅かった〜、遅かったわいなう。この年月艱難して、尋ね焦れた阿曾次郎様に、折角逢うたに目くらの悲しさ。それとも知らず別れたれど、どうやらお声が気にかゝり、戻つて聞けばやつぱりその人。おのれやれ追つ付かうと、後追うて来ればこの川止め。関助、どうせう」

「ヲ、お道理だ」

「どうせう」

「ご尤もだ」

「どうせう〜ぞいの」

「御尤もでござりますわいなう。何が、拙者奴もあ

なた様のお行方を尋ね廻るうち、一昨日の夜の夢に、
浅香殿にめぐり逢ひ、即ちあなた様は島田の宿、戒
屋徳右衛門方にござると言はしやると思へば目が覚
め、シヤ何でも不思議と夜を日に継いで参つた甲斐
あつて、すんでの事にあぶないところを。ヤレ〜
嬉しや〜〜なあ。下郎めがお目にかゝる上はお
氣遣ひなされますな。駒沢様にお添はせ申す。しか
し浅香殿は坂東巡礼となつて、東海道へ尋ねて見え
る筈。ガお逢ひなされしかな」

「サレバイノ、その浅香に後の月、浜松で廻り逢う
たが、その夜悪者に出逢ひ、数力所の手疵。死ぬる今
際にわしを呼び『島田の宿には私が生みの親古部三
郎兵衛といふ人あり。この守り刀を証拠に尋ね行き、
秋月弓之助が娘と名乗つて逢へ』と言ひ教へ、可愛

や〜ついに死にやつたわいの」

「ム、スリヤ浅香殿には最期とや。ホイ」

『はっ』とばかり驚く内、始終聞きある徳右衛門

「ム、そんならお前は秋月弓之助様の御息女様、ま
た浅香というは我が娘であつたか、ム、」

と心に領き件の短刀、抜く手も見せず、腹へぐつと
突立つれば『こはなに〜』と驚く兩人

「ヲ、御不審はご尤。が先ず〜一通り聞いてたべ。

ハ、ア私事はそのお尋ねなされる、古部三郎兵衛と申
す者、即ちあなた様の祖父秋月兵部様には三代相恩。

若氣の誤り奥女中と忍び合ひ、お手討になるところ
を、弓之助様に助けられ、女もろとも国を立退き、産
み落せしは女の子。貧苦の中に育つる内、二つの年
に母は病死、男の手で育てもならず、伯母が方へこ

の短刀を添へて養子にやりしが、廻り廻りて思はずも親が命を助けられし秋月様へ御奉公。死んでも忠義を忘れず導きをつたか。オ、でかしをつたな。また最前駒沢様の仰せには、唐土伝来の目薬、甲子の年の男子の生血にて服する時は、いかなる眼病も即座に平癒とのこと。即ち某甲子の生れなれば、我が血汐を以て件の薬に調合し、早くあなたへお進め申せ。サ、早く〜」

『実にも』と関助用意の水呑取出し手負ひの血汐受け止め〜、泣入る深雪が懐の妙薬取り出し差寄せれば、深雪受取り『わが夫の情に余る賜物』と押戴き〜〜一口に飲み干せば、不思議や忽ち両眼開き、蟻の這ふまで見え透くにぞ、深雪が嬉しさ関助も、悦び合ふぞ道理なる。

「ア、嬉しや〜、最早この世に望みなし。いづれもさらば」

『さらば』と刀引廻し、笛のくさを刎ね切つて、名のみ流るゝ大井川、水の泡とぞなりにける。後や枕に取り縊り、わつとばかりに泣く深雪。露の干ぬ間の朝顔も、山田の恵みいや増り、茂れる朝顔物語、末の世までもいちじるし。